専光寺付近遺跡ミニ展示

2020 年 9 月 29 日

はじめに

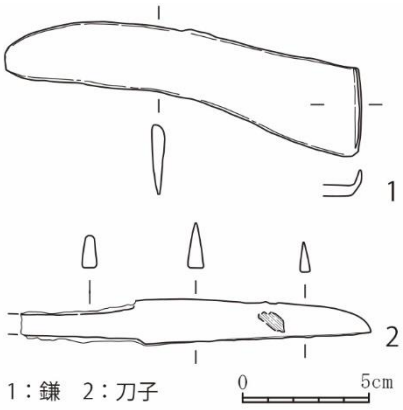
専光寺付近遺跡は、本町の南部、利根川を眼下に望む大泉台地の南端に位置します。発掘調査は仙石土地区画整理事業に伴い、昭和 62 年８月から平成３年３月まで実施されました。現在、発掘調査で検出された住居跡や出土した土器等の整理作業を実施しております。今回、その経過報告の一端として、集落から出土している鉄製品や小鍛冶遺構を紹介します。

住居跡から出土する鉄製品

鉄は弥生時に朝鮮半島から伝えられました。その後、古墳時代になり、鉄製農工具の改良が進み飛躍的に農業生産が向上しました。これらの鉄製品は、威信財(いしんざい)の一つとして、当初は古墳に副葬されていましたが、しだいに集落内の住居跡でも出土するようになりました。

本遺跡では、時期が確定できる住居跡が古墳時代 121 軒、奈良時代 60 軒、平安時代 25 軒の合計 206 軒あります。鉄製品を出土した住居は 138 軒あり、県内では鉄製品の所有率が高い集落といえます。

出土した鉄製品は、鉄鏃(てつぞく)・馬具(ばぐ)、鋤鍬先(すきくわさき)・鎌(かま)、火打ち金、紡錘車(ぼうすいしゃ)、ヤス・釣針、釘、鉄鎚(てっつい)などがあります。最も多かったのが刀子で 38 軒、次に釘 28 軒、鎌 18 軒の順となります。

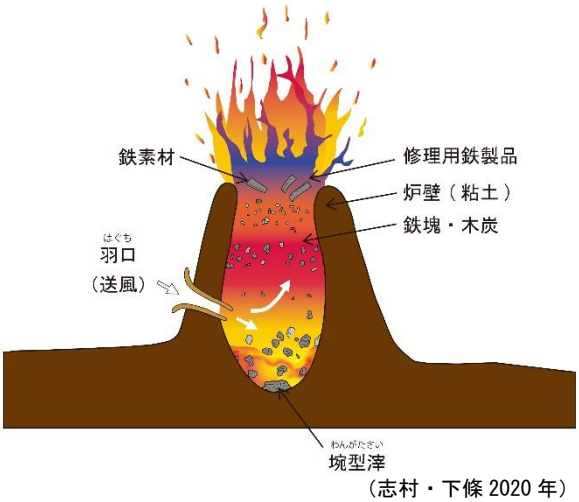


出土した鉄製品

小鍛冶遺構

108 号住居が廃絶した後、廃屋を利用して３基の鍛冶炉が一列につくられています。いずれも平面形が隅丸方形や楕円を呈し、５世紀後半につくられたものです。１号炉は長軸 45 ㎝、短軸 42 ㎝、深さ 16 ㎝。２号炉は長軸 40 ㎝、短軸 35 ㎝、深さ 14 ㎝。３号炉は長軸 37 ㎝、短軸 20 ㎝、深さ 16 ㎝の大きさです。１・２号炉の底面には多量の焼土が残され、周辺には高坏(たかつき)の脚部を転用した羽口(はぐち)が多数出土しています。羽口は炉壁に差し込んで、炉内に風を送風する装置のため、高温により端部は灰色にかわり発砲しています。また、製品を作るためのハンマー、鉄鎚が出土しています。そのほか鉄滓が多量に分布していました。

鍛冶炉は地面を掘り窪め、スサ入り粘土で円筒形状に積み上げ、壁体の下部に送風管の役割を果たす羽口を取り付けたもので、椀形滓(わんがたさい)の形状から炉の底面は尖っています。使用方法は、炉内に木炭を入れ火をおこし、鉄の素材となる鉄塊や分割した椀形滓、修理する鉄製品等を入れ、火床に羽口で風を送り熱します。



（志村・下條 2020 年）

鍛冶炉の構造図